武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節祈祷会
聖霊の人
――使徒行伝第16章6～34節――

１９７９年６月３日
小池辰雄

神を敬うルデヤという女　聖霊の焦点　十字架で無者　十字架という門　今ここにおいて　不思議な手紙　霊震　信は言が人となる　キリストの十字架は最大の担い　十字架の焦点　落ち穂拾い

【使徒16】

6 彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7 ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8 遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9 パウロ夜、幻影（まぼろし）を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。10 パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴（おもむ）かんと為（せ）り。

11 さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、12 彼処よりピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、われら数日の間この町に留まる。13 安息日に町の門を出でて祈場（いのりば）あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14 テアテラの町の紫布の商人（あきうど）にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。15 彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強いて我らを留めたり。

16 われら祈場に往く途中、卜筮（うらない）をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女（はしため）、われらに遇う。17 彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高（いとたか）き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』18 幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。

19 然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラ

スとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』

パウロだってロマ人なんだけれどもね、

22群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、26俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。

●神を敬うルデヤという女

使徒行伝16章の6節から読みます。

6彼らアジヤにて

小アジヤのことです。

御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、

フルギヤというのはガラテヤ州の地ですから、

7ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。

大体、紀元50年の秋らしいです。

8遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9パウロ夜、幻影を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。

この「我ら」という言い方がこれからずっと数節続くので、これは「ディ　クヴェレ」（Q資料）と言われているところです。

10 **パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴(おもむ)かんと為(せ)り。**

11 **さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、12 彼処よりピリピにゆく。**

「ピリピ書」というあのピリピです。これはアレキサンダー大王のお父さんのピリポが建てたから、それで「ピリピ」という。

ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、

コロニアですね。

われら数日の間この町に留まる。13 安息日に町の門を出でて祈場(いのりば)あらんと思わるる河のほとりに往き、

「河のほとりの祈り場」というと、奥田君の家のことを思い出す。正に河のほとりの祈り場ですが、

其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14 テアテラの町の紫布の商人(あきうど)にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、

「ルデヤ」（リディヤ）という。ヨーロッパで最初にパウロの福音を聞いたのはこのルデヤという女性です。日本では女性をいい加減にしている面がだいぶあるようですが。歴史を担っているもの、歴史を陰でつくっているもの、それは――妙な女もいますけれども――本当に縁の下の力持ちとなって、大地の中のダイヤモンドみたいな、そういう女性が、その祈り、その愛、そういったものが、このキリスト教の歴史でも歴史を形成している。

アッシジのフランシスのお母さんもそうです。アウグスチヌスの母もそうです。ウェスレーのお母さんもそうです。伝記を読んでごらんなさい。素晴らしい方々ですから。

日本で本当に女子教育がそういう意味で大事だなんて誰が思っているかと思うんですが。いわゆる教育ではダメです。これは本当に福音が浸透するその魂――たとえ結婚しようがしなかろうが――女性の存在が実は次の歴史の大事な力になっている、という意味において、女の方々は大いに自重していただきたいと思う。

●聖霊の焦点

このルデヤという女性、それは何といっても、深い祈りです。

私は『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第4巻）というのを7月一杯に書いてしまいますが、その序文に、

「祈りが焦点である」

ということを書いた。「焦点」ということは、火を発するところ、「ブレンプンクト」（焦点）です。質的に第一級の人物は――あなた方一人びとりそうなれる――これはそういうブレ

ンプンクト、焦点に、その魂が本当に聖霊の焦点となっているかと。それだけです。聖霊の焦点となって、聖霊に燃えるような魂。聖霊に燃えるのでなかったらダメなんです。どうぞ、この一点、焦点的存在になっていただきたい。それはそこに原始力が宿るんです、聖霊という原始力が。それで爆発するんです。

そういう「神を敬うルデヤと云う女性」、これがヨーロッパで最初に焦点を結んで燃えた。ダイヤモンドのように光った。

主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。15**彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、**

これはいい加減なバプテスマではない。パウロからバプテスマを受けたら、もうこれは聖霊が伝わってしまう。

「按手礼」というね。「礼」の字なんかいらんですよ。「按手」だけでいい。形式化してしまうから、しょうがない。

ドイツで私は牧師に、

「洗礼を受けたか？」

と聞かれた。

「洗礼なんか受けない。私はフライエ・クリステン、自由なクリスチャンだから、そういうのは受けてない。もう天からいきなり来ました」

と言うと、びっくりするんだ、向うでは。そんなことを言うやつはいないものだから。

天からいきなり聖霊のバプテスマを受けた。あるいは、ある人を通して聖霊のバプテスマを受けることもあります。どっちだって構わない。使徒行伝には、パウロやペテロが按手すれば、それによって霊が与えられて、異言を発したり、預言したりなんてことがあちらこちらに書いてある。

我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強いて我らを留めたり。

最初に御霊のバプテスマにあずかる。そして、一家ことごとくキリスト者になってしまったと。なんでもなく書いてあるけれども、その内容は実に素晴らしい内容をもっているわけです。

●十字架で無者

16**われら祈場に往く途中、卜筮（うらない）をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女、われらに遇う。**17**彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高（いとたか）き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』**18**幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。**

「イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず」
と。私はこれ式なことを時々やります。今までに経験しております。
日蓮宗の霊に憑かれたのがここにいたよな。
「あなたの行く所は霊が強いから、私は西荻窪の駅で待っている」
と、その霊がその女に言う。
「先生、そういうのが私に憑いているんです」
「そうかい」
と。それから、この集会が終ってから、清瀬にまた伝道に行きますから、
「では、私と一緒に来なさい」
と。今度は清瀬の集会で徹底的にやった。まぁ、日蓮宗だから、わるくはないからね、私は。別に喧嘩はしなかった。
「今までご苦労さんでした。今度は、キリストの御霊でもってこの人は行くから、聖名によって去ってもらいたい」
とはっきり言いました。それからは、その人はもうその霊が憑かなくなったと聞いております。私はいわゆる霊的な男ではないけれども、キリストを信ずることにおいてははっきりしているから。それでひとつも恐くない。
もっと凄いのがあった。呪われて、
「痛い、痛い」
なんて言い出したのが。それも私が祈っているうちに、
「だんだん脱けていきます」
なんてね。相手は藁人形でやっているんだよ。そして、向うが倒れてしまう。なかなかいろんなことがありました。
皆さんも、ひとつも恐いことはない。問題は、こちらの霊的状態とか、そんなことではないから。キリスト一点張りです。それがいつも言っている、
「こちらが本当に無者となりなさい」
ということです。「無者となりなさい」と私が言うと、
「なかなかなれません」
なんて。そうじゃない。私たちは、
「私は無者であります」
とはっきり言っていもいいんです、
「私は十字架で無者であります」
と。十字架という恩寵は、もうそこを完了して、私たちに現在完了でちゃんと与えているんです、この恵みというのは。二千年前ではない。二千年前が今もまた常に現在完了として与えられている。それが霊の現実なんですから。

自分の相対的な状態がどうであったって、そんなことは気にしないでください。それを気にしていたら、いつまでたっても始まらないですよ。そんなことは五十歩百歩で、みんな同じことなんだ。偉いひとなんか一人もいない。我々はみんな同じこと。

問題は、このキリストという――これはもうとんでもない人です、正直。罪なき人だから仕方がない――これが無条件にくださったということ。キリストは条件付きでくださらない。キリストのくださるものはみんな無条件です。自然界の空気は無条件で我々は吸っている。キリストの気は無条件なんだ。霊気は無条件に吸っている。肉体は空気を無条件で吸っているが、聖霊という気は、これもまた無条件でいただけるんだ。なぜ、それに条件を付けているか。

「まだ私の信仰は」

だとか、

「まだ私は愛が足りない」

だとか、

「まだ私は聖書研究が足りない」

だとか、何をやっているかと。無条件です。

無条件なものを受けとると、そこから始まるんですよ、いろんなことが。ええ、そこから。努力じゃない。人間的な努力はあったっていいですよ。しかし、それはいつも推進力を持っている努力なんです。それは苦しくない。

人間の構造というものは、一つの言葉で割り切れるようなものではない。それを割り切ったように考えたら、苦しくてしょうがないですよ。いいですか。ゴタゴタしていて結構ですから。ゴタゴタしている中に、ゴタゴタでないものがグーッと動いているか。それだけが問題なんです。そうしたら、そのゴタゴタはだんだん浄化されてしまう。もの凄い浄化作用を持っているんだ、これは。霊化作用というやつ。

「今、状態はどうだ」

なんて、そんなことを気にしないでください。そういう

「無者」

ということ。

「無者即無限無量」

といつも申し上げている通りなんですが。恐いことは一つもないというわけです。

●十字架という門

これから祈祷会だけれども、

「主さま！」

と言って祈るでしょ。どういう気持でこれを言うんですか、「主さま」と言うと同時に、自

分の全身をキリストの中に投げ入れてくださいよ。神の中にキリストはいつもござる。「神の懐の中に」と書いてあるとおり。今度は、私たちはキリストの懐の中に入る。

「神・キリスト・我」

これは三つの環だ。これは一筆書きで書ける。一筆で書かなくてはダメですよ。

「これは一体何ですか？」

なんて。これは大変な、普通の文字よりかはるかに素晴らしい字だ。この中に入ってしまう。

「主さま！」

と言って、この中に飛び込むんです。ではなぜ、このところに飛び込めるのか。ここに十字架という門があるから。十字架という門があるから飛び込めるんですよ。なかったら飛び込めない。

「求めよ、さらば与えられるぞ」

というのは、

「私を求めなさい。必ず私をお前にやるぞ」

ということだ。他のものを求めたって、やるかやらないかは分からない。

「私を求めたら、私は無条件だから、無条件にやる。お前の状態がどうであろうと、ちゃんとこの十字架という無条件の門が開かれているから」

と。十字架という門は、何か条件が要らない。

●今ここにおいて

十字架の片一方の盗賊はこの十字架上のキリストに最期の瞬間で、

「私はさんざん悪うございました。せめても御国にいらっしゃるときに覚えてください」

と、自分を投げ出して言った。キリストは、

「よし。お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。無条件ではないですか。

「でも、お前はこうだったから、ちょっと待て」

なんては言わない。「マイナス99」の生涯を送ってきたが、最後に「I」という告白をしたら、この「I」の方が「マイナス99」よりか強かった。そういう世界です。

もう電光石火の世界ですよ、これは。皆さん、明日ではないですよ。「今ここにおいて」という、バッとその中に入れる世界ですから。何を躊躇しているんですか。

「いやぁ、私はもうキリストの中にいた」

と言って、その中にぶっ倒れてくださいよ。本当だから。

現代人は、特に都会人は意識過剰だ。どうして、私みたいにバカになってくれないのかな、みんな。私は――「大愚」と言ったのは良寛か？――私なんかは大大愚だ。一番の大バカ者だ。

バカになりきらなくちゃ。なりきれませんよ、なかなか。キリストはバカにしてくださったんだ、私を。

「お前をバカ者にした」

と。

「神につけるバカはこの世の利口よりか上だ」

という。コリント前書の1章か2章のところに書いてある。

もう単純なんですよ、とにかくみんな七面倒くさくしてしまっているから、「キリスト教」なんて言って。ただ「キリスト」でいい。

パウロさんは、復活のキリストにとっ捕まって、引っくり返されて、あれは本当のバカ者になりました。そうしたら、パウロはもう自分の今まで持っていたものを一切投げ捨てた。

「投げ捨てたら、投げ捨てたものは、今度はキリストのものとして自在に使えるようになった」

と、こういうはなしだ。投げ捨ていたら、パウロは焦点を結んでしまったら、こいつがグーッと元へ戻ってきて、今度はキリストという焦点中心に動きだした。

だから、凄いんです、パウロの書簡が。神さまというのは、もう実に大芸術家ですから。自己中心なやつをキリスト中心に引っくり返してしまったんだから。

地球は太陽中心に動いている。太陽中心に。私たちは今度は、キリスト中心に動くような、もうキリストの霊でもって引っ張り回されて、どうにもならん、これから離れるわけにいかんということ。

「御前を離れることができない」

なんて、詩篇139篇に書いてあるけれども、あの「離れることができない」というのは、ただ神さまが見ているからではない。あの詩篇はまだ足りない。

「キリストの霊が引っ張り回しているから、私は離れるわけにいかん」

と、こういうわけです。あれは旧約の世界だから、へたするとおっかないよ、「神さまが見ているから」なんて。そうじゃないよ。神の憐れみが、キリストの憐れみが引っ張り回して、こっちがどうであろうと、お前がどこか他へシューッと飛んでいくようなことはしないぞと。それだけの吸引力を持った御霊の力です。

ありがたくてしょうがない。ありがたくて、本当に。どうして私はこんなことになってしまったかと、正直。私だってあなた方と同じで、バカ言ったりね、いろんなことをしているよ。けれども、そのバカの奥にバカでない何かがある。それは神さまのもの、キリストのものがある。それだけのはなしだ。

「先生というのはそんなに立派なんですか。ところがちょっとおかしいじゃないですか」

なんて。うん、おかしいよ、さんざん。さんざんおかしいやつだ。そうすると、躓くよ。

そうじゃないんですよ。そんなことで躓いているのは、私を見ているから、キリストを見ていないから。

「わがうちにあるものを見よ」

ということ。

「しょうがないやつだから、私はお前を使う」

と。ユダヤ人というのはしょうがないから、この頑なな民を捕まえて、そして、万民の救いの基にしようという。

ユダヤ人の中で預言者たちがやっと神さまに選ばれた。ついに、預言者たちの最後にキリストがやってきて、彼はこの預言者たちの一切の焦点となった。このもの凄い焦点が今度は、使徒たちにまた展開して行った。キリストというのはこういうもの凄い焦点ですから。そして、これは使徒たちに限らない。我々自身がその使徒的信仰の一人となって動き出す。人生、これほど楽しいまた生きがいのあることはないんですよ。もう本当にこの福音にぶつかって、御霊をいただいて、もう他に何が要るかと。

それで私は、パウロもペテロも、使徒行伝がなぜこんなに楽しくなってしまったかというと、そういうことが分かったからです。ところが、無教会の先生方は――また無教会の悪口を言って申し訳ないけれども――

「あれは行為の世界で、信仰の世界とは違う」

ようなことを言う。冗談じゃないよ。信が本ものの信であるなら、これは爆発している世界なんだ。信が爆発している世界なんだから。いわゆる行為じゃない。パウロもヤコブも同じ世界なんだ。

「信仰によって義とされる」

「行為によって義とされる」

と言って、喧嘩しているかというと、そうではない。そんなことをして分析したのは、あれはルターのまちがいだ。今はもう、我々日本人の目で、霊眼でもって聖書を新しく読まなくては。もう行き詰まっているんだ、向うの神学は。

●不思議な手紙

私のところに不思議な手紙が来た。これはどういう女性だかね。

「突然、お便りを差し上げる失礼をお許しください。私は本屋で見つけた曠愛新書を通して先生と出会った者です。それ以来、先生を世界に類のないくらい束縛されない自由に空中を駆けめぐる筆の方だと存じあげました。くだらない女がこんなことを申し上げるのは失礼と充分知っています。しかし、先生、季刊紙にあまり力をお入れにならず、小さな狼煙などあげないで、『無の神学』を静かに静かにお書きになってください。小池先生がねらっておられる方向は世界の神学界の狂わんばかりの悩みに対する答え

です。西洋が苦しんで暗中模索してきた無即の事態を、伝統のキリスト教をも包摂する言葉をもって書かれると信じています。『無者キリスト』が日本語で書かれたキリスト伝では最高のもので、血を滴らせながら響かせる津軽三味線としたら、『無の神学』が五線紙に歌いあげられたピアノコンチェルトになると喜び待っています。」

なんて。大変な人だ、これは。

「賀川豊彦さんに負けないものを書いてくれ」

なんて、なんのかんのと書いてある。まぁ、あまり読んではうまくないからやめるけれども。どういう人だかわからない。そういう、本当に読んでくれる人が時々いるんだよな。私がこれだけのことができるかは別問題だけれども。しかし、私はそれを狙ってはいます。

●霊震

それで、利を得る望みがなくなったので、パウロとシラスとを捕らえて、

19 **然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』**

パウロだってロマ人なんだけれどもね、

22 **群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23多く打ちてのち獄に入れ、**

まぁ酷い目にあっているんだよ、パウロは。

獄守に固く守るべきことを命ず。24獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、

「神を讃美する」という。ただ苦しんで祈っているのではない。

26 **俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。**

どういうことですか、これは。霊震ですね、地震ではない。私はそこに

「天震」

と雅号に書いた。私はこういう地震、天震が好きだから。自分の名前の「辰」という字が入っているから。朝の集会では、

「天晨」

と書いた。天の晨、もう永遠の世界。霊震が起きたわけです。

27 **獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、**

我ら皆ここに在り』29**獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、**30**之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』**

「われ救われん為に何をなすべきか」

という、この言葉は時々出てくる。

●信は言が人となる

31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』**32**斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。**33**この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、**34**かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。**

さきほども、私は信の字を祈りのところで言ったら、異言が爆発してしまった。「信ずる」という言葉はもうみんな、耳にたこができるほどに聞いている。

神の言たるキリストが、ロゴス・キリストが人間、私たちの中に入ってくる。これが「信」という字。言が人となる。キリストの言が、御霊の言が受肉すること。これが信です。サイコロジカル（心理的）にただ「信じ込む」なんて、そんなことではない。全存在的に受けとることなんです、信というのは。

「信ずる」と言うときには、自分がぶっつぶれる。自分が、自分に対しては「否」です。

「私が信じました」

なんて、呑気な顔して言えないんです、この本当の信というのは。生まれつきの我々は信ずることができない。上からの力で信ぜしめられるんです、

「参りました！」

と。福音書を見て、「参りました！」ということが「信ずる」ということです。誰がそう言ったか。本当にそうですよ。福音書を読んで「参りました！」と言わないやつは、どんなに信じたような顔したって、ダメだよ、そんなのは。我々は、生まれつき、そんな「信ずる」なんて大げさなことはできっこないんだ。信じたような顔して、「信じているかの如く」だ。

だから、

「信ずるとは己に対して否と言うこと」

ギリシア語で「ウー」（否）という。自分に対しては「ウー」と言って、キリストに対しては「ナイ」（然り）と言う。キリストは、「然り、然り、云々」という、コリント後書1章かどこかに出ていたね。ところが、「然り」と「否」なんです。自分に対しては「否」と言って、キリストに対しては、

「あなただけは本ものだ」

と言う。「本ものだ」と言って、その下に降参し、その中に自分を投げ入れることが「信ずる」ということ。それが、キリストという受肉者に私たちが受肉することなんです。いいですか。聖書は実は、1頁も2頁もそんなに読めないんだ。ある時は通読しますよ、私も、グーッと。それはまたそれで意味はあるけれども。本当に読むとなったらば、そいつが化体しなければ、読んだことにならない。化体しなければ。体に化さなくては。聖書の文字が化体しなければ。こんなことを言うと、

「あれは神秘主義だ」

なんて、すぐ言うんだよな。勝手に言わせておけばいい。キリストは最大の神秘家であり、パウロは最大の神秘家である。ダイスマンだとか、シュバイツアーなんてのはちゃんとそのことを見ている。一如にならなかったら、一つにならなかったら、信にはならない。

パウロは、シラスも、そういう人でしたから、ここでもって彼らは繋がれていたって、

「どっこい私は本当は自由だ」

と。ペテロもそうです。鎖で繋がれていたけれども、彼も解けてしまった。ペテロのことがその前の方に書いてある。

「こういう現実には私は参りました。このような現実に本当に質的に私も入りたい」

「よし、お前を入れてやるよ。いや、もう入っている。来ているではないか。何かしらんけれども」

てなことですよ。

●キリストの十字架は最大の担い

だから、

「今日は少し調子が悪い」

だとか、何とかしたら、集会に来なさいよ。聞いているうちに治ってしまうから。聞いているうちに、魂が本当にそれを受けとっていれば、もう肉体に作用するに決まっている。「何をか」と、どんなことにも絶対に負けませんから。ええ。キリストは最高の霊ですから。イエスはもの凄い、最高に力強いですから。

さっき、「担え」と言ったね。

「十字架の担い」

は最大の担いなんです、キリストの十字架の担いというのは。これはもう最大の担いです。世界中のやつらを全部担ってしまっているんだ。大変なものですから、キリストの十字架というのは。大変なひとです。もう原子爆弾もへったくれもないですよ、このキリストという原始力は。それを思うだけで、もう私はグーッと…（異言）…。

これはもう仕方ないです、そういう世界に入ってしまうと。これが担いの、砕けの、もの凄いただ愛なんていう言葉でも表すことのできない愛です。

だから、キリストは墓石を蹴飛ばして出てきたではないですか。ローマの兵隊はみんな逃げてしまったではないですか。これも霊震ですから。至聖所の幕が二つに切って落とされてしまった。旧約の宗教はもう要らんという。キリストは全部これを果たして成就してしまった。何ということですかね、これは。

聖書というのは驚くべきドラマですから。こんなドラマが書けるかというんだ。シェイクスピアが来ようが、ゲーテが来ようが、何が来ようが、とてもかなわんです、聖書というこの生きたドラマには絶対に。なぜ、聖書をドラマだとはっきり言わないか。教えだなんて言っているか。教訓でなんか、人の魂が救われるかというんだ。もう私は憤慨に耐えないね、今のキリスト教は。

「わが名のために全ての人に憎まれん」

と。結構です。私はキリストに愛されれば、もうたくさんだ。それくらい、私たちにとっては、この十字架はのっぴきならない天界の焦点です。そうしたらもう、聖霊は来てしょうがないですから。

人間は成り上がったらダメですよ。いつも空っぽでもって進んで行かないと。その空っぽは、空っぽでありながらもう満ちているんだ。全く逆説的なものですから。

まぁ、使徒行伝のどこを読んでも、聖霊以前の無教会の私だったら、とても読めない。ところが、御霊が来てから、もうこれは楽しくてしょうがない。福音書も。ぶっ倒れると、その中に入って行くんだから。

「キリストさま、参りました！」

と言えば、その中に入って行くんだから。私はそういう角度で、あの『無者キリスト』を書いたんです。私はいつ死んでもいいんです、あれ一巻があれば。あなた方が展開してくださいよ、その先は。

まぁ私の聖書を見てください。どうにもならんんです、ボロボロになってしまって。もう泣きたくなる。

●十字架の焦点

パウロはそのように、パウロでもペテロでも、本当に彼らがキリストと一つになった。一つになる。キリストと一つになったら、本当に彼らは御霊の生命を持っていた。

「さぁ、聖霊というのは、先生はそんなことを言って力んでいるが、どうしようかな」

なんて。

「どうしようか？」

ではないですよ。だから私が、

「秘訣は十字架にある」

と言っている。教会でも無教会でも、

「十字架、十字架」
と言っているけれども。
パウロが一番はっきり言っているのは、何といっても、ガラテヤ書2章20節、
「われキリストと共に十字架せられたり。われ生く、されどわれにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」
と。
「御霊のキリスト、キリストの御霊が来り給えり」
と。さっきから申し上げているとおり、いいですか、何か自分が徹底したような境地にならなければならないと思ったら、辛いですよ。ごちゃ混ぜでいいですよ、ごちゃ混ぜで。ごちゃ混ぜでいいけれども、そのごちゃ混ぜを処理しようとするから、おかしくなる。ごちゃ混ぜの奥に一点がある。全然そのごちゃ混ぜと次元の違ったものが。この一点を持つか持たないかなんです。その一点に焦点すると、これは十字架が焦点になっている。その十字架の焦点に祈り込むことが、さっき言った、
「祈りという焦点だ」
と言っていること。そうして、本当に自分というやつからぶっ飛ばされた、何かしらんが、その現実に入る。そうすると、どうですか、御霊が来るから、グーッと。もうその他に私は言いようがないね。
「十字架と聖霊は離すことができない」
と。それを何か熱っぽい祈りをして、そして何か聖霊が来たようなね、それは宗教の世界はそういうのもあるよ。ある時はいいかも知れないよ。しかし、危ないよ、そんなのは、十字架という土台がなかったら。
「もう十字架の他に何も語るまじと思う」
なんて、パウロがなぜあんなことを言ったか。それではパウロは聖霊を語らないかというと、そうじゃない。
「この土台を抜きにして何が聖霊だ」
と、パウロは言いたいんです。パウロは、「十字架」と言う時に「聖霊」がそこに来ている。「聖霊」と言う時にはその奥に「十字架」がちゃんと立っている。いいですか、はっきりしてくださいよ、これを。
私はいろんな神学書なんかを少しはかじっているけれども、そういうことをはっきり言っているのはほとんどいない。構造的にはある意味において言っているのはあるけれども。烈々としてそのことを語っているのを、私はまだ読んだことがない。
それでなければ、なぜ、キリストは十字架にかかってから、それから聖霊を下さったんですか。その前にキリストはみんなにじかじかに聖霊を下さったらいいじゃないですか。それをなさらなかった。

「わが去るは汝らに益なり」

というのはそのことなんだ。

「お前たちは散るけれども、今に集めてやるぞ」

と。キリストというひとは、もうそれだけ見通しをちゃんとつけている方です。大変なもんです。もうこの一点を――私が20代にこれだけのことを聞いていれば、今ごろこんなボヤボヤしたことではなかったと思うんだよな。でも、誰もそこまで言ってくれなかった――それを今、あなた方若い人がこれを聞いたら、これを逃がしたら、大変なことですよ。この他の現実の何処に行って、何をおっ始めようというんだ。冗談じゃない。

なぜ、このような福音に来ないか。私ではないんだよ。このダメな野郎を通して神さまは今、どうしても語らしめざるを得ないことを仰っている。パウロが、ペテロが、ヤコブが、ヨハネが、天界から加勢してくれる。我々の友だちはこの天界の使徒たちですよ。そういうぶ厚な現実にいてくださいよ、ぶ厚な現実に。

ただ見える現実ではない。見えざるものを望むのでもない。見えざるものを現実として受けとっていく。まぁ始末がわるいね、私は本当に。時々、パウロさんの言葉もなおもの足りなくなったりするから。どうして私はこんな簡単になってしまったんだろうかね。

●落ち穂拾い

今度は、じかじかにキリストのところに行きます。どこでもいいですけれども、ルカ伝14章15節、

「15同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』16之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。17夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、18皆ひとしく辞りはじむ。初の者いう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」19他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験すために往くなり。請う、許されんことを」20また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能わず」21僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言う「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」22僕いう「主よ、仰のごとく為したれど、なお余の席あり」23主人、僕に言う「道や籬の辺にゆき、人々を強いて連れきたり、我が家に充たしめよ。24われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味い得る者なし」』」（ルカ14・15～24）

「われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに我が夕餐を味い得る者なし」

と。

「いわゆるユダヤ人とかいわゆるクリスチャンはダメだよ」と、キリストは言おうとしているわけです。それで、みんなに貶（けな）されたり、退（しりぞ）けられたり、そういうのを連れてこいと。また、いろいろな身体障害者もある。まぁ、キリストの言葉は乱暴ですよ、ずいぶん。

私たちは、招かれざる客、異邦人（まろうど）です。異邦人は招かれざる客。東の極（はて）の極東の日本は一番遠いんだ、このユダヤの方から。最後に、この招かれざる地の極のような所にいる私たち。なかなかキリスト教が広まらない。また、プロテスタントとカトリックをみな合せても、人口の1％にも足りないんでしょ。こんな情けない、またその中の何％だか知らないけれども、本当のキリスト者というものは幾人いるかと。

いいよ、そんな人のことはどうでも。私たちは、この招かれざる客――

「ナハレーゼ」「落ち穂拾い」

という。私たちは落ち穂なんだよな――私たちは落ち穂で、キリストに拾われているんだ。落ち穂で拾われた者たちだ。

これから20世紀はあと20年、世界は一つになるとは思わない。そうありたいけれども、どっこいというわけです。招かれざる客で、落ち穂であるが、我々はまた落ち穂を拾わなくてはいかん。

「ああ、この魂は」

と。それは、あなた方、伝道は一対一ですよ。一対一。まぁある時は、大きな網を張るさ。けれども、本当の伝道は一対一。膝つき談判。

「二、三人、わが名によりて集まるところにわれ在り」

という、キリストの言われたあの、「二、三人、わが名によりて集まる」という、そういった伝道が一番本式の伝道なんです。それは本当ですよ。もうキリストのこれがあふれて、告白してごらんよ。そして、「祈りましょう」と言って、祈ってごらんよ。自然にその人たちが救われていく。

ここに今、何人いるんですか。30人くらいか。これが来年までに一人が一人を救ってごらん。60人になる。その救われたのがまた救ってごらん。そのまた倍になる。それを本当にやらなければダメだ。これが「落ち穂拾い」なんです。救われたい人はたくさんあるんです。求めるものを知らないでいるから。

「これですよ」

と。私のパンフレットでも、新書版でも、何でもいいですよ、持って行ってください。私は金のことなんかどうでもいいから。救われたら、感謝しましょう、その人は。

皆さん、いわゆる律法ではないですよ、福音の世界というのは。もういつ、世界がどうなるかわからん。一番危ないのは日本だ。その時に――天災、人災、何が来るかわからん――この使徒的信仰が身についていなかったら、うろたえてしまう。質の問題です。

「私はキリストに捕まえられました」
と大声で叫べるような人になってください。

「どうにもなりません、逃げようにも逃げようがありません。ダメだからこそ、私は捕まえられました」

と。なぜ、そう言わないんですか。ダメでないんですか、皆さんは。私はダメだから、捕まったんです。パウロは、

「われは罪びとの首（かしら）なり」

と言った。罪びとの首と告白したパウロが最大の伝道者であったではないですか。

実は「罪びとの首」になったのはキリスト自身です。キリスト自身が十字架にかかって、罪びとの首になってくださった。そして、一切をすっ飛ばしてくださった。本当にすっ飛ばしてくださった。さっきから私は繰り返して言っているのは、ただ繰り返しではない。打ち込みなんです。打ち込みでもって、本当に何かしらんけれども、もうすっ飛ばされて、そして生命というものが、御霊の生命というのがここに来た…（異言）…。

このキリストはどうしようかと、ありがたくて。だから、人が来れば、私は何かというと、話がだんだん知らない間に福音の話になってしまって、相手がびっくりして喜んで帰っていく。理屈を言っているのではない。告白せざるを得ないんです。

「こういうわけです。あなた、この生命を受けてくださいよ。こんな素晴らしい生命がどこにあるんですか」

という。

「いわゆる招かれたる者が、いわゆるユダヤ教が、いわゆるクリスチャンがみんなダメだ。お前たちは、いわゆるではなくて、本ものになれ。そういうのを地の極から呼んでくる」

と、キリストは言われる。私たちは拾われた者です。天界に拾われたんだ。だから、そのように、人を今度は拾って行かなくては、一人、二人と。そして、本当に一人の魂がこれに触れて喜ぶのを見ることほど私はうれしいことはない。正直、私は一番うれしいのはそのことなんです。魂が救われて、

「ああ、これだ」

と言って喜んでくれる。御霊のバプテスマを受けてくれる。では、あとは祈りましょう。